

民話を楽しくもっ

ゆうぎの民話

お鯉さま

文・ゆうぎおはなし会再話
挿絵・佐々木 明

結城市の北の方に高橋神社というお宮があります。今は栃木県小山市になっていますが、ずっと昔は結城の領地でした。

祭神はイワガムツカリノミコトです。「延喜式」という書物にイワガムツカリノミコトはヤマトタケルノミコトが東国平定に下ったときに、ヤマトタケルノミコトたちの料理係りとして従ってきたと書かれています。高橋神社は、今からおよそ千年も前に作られた、とても古い神社です。この神社の氏子は、鯉を捕ったり食べたりしないばかりが、五月の節句にこいのぼりもあげないと言っても不思議な話が伝わっています。

むかし、ずうっとむかしのはなし。高橋神社は東に鬼怒川、西に田川が流



おもしろい話を
してあげたい。
のびるかな……

いちゃん、
どんなはなしが
あったのっ



れ二本の川に挟まれたところに建っています。

この人たちは、この水を田に流したり、飲み水や洗濯にも使ったりしていましたけれど、この川は鬼の怒る川という名前のように、時々大水になって田んぼや畑を流したり、水が濁って飲み水にも困ったりしました。

後一条天皇の長元二年（1029年）の頃のことです。村人たちが相談して、飲み水に困らないように井戸を掘ろうということになって、高橋神社の庭に井戸を掘ったそうです。

ところがいくら掘っても水が出ません。仕方ないので他のところを掘ってみましたがやっぱり水はでません。「困ったなあ、いくら掘っても水はでない」
「神社の庭を掘ったので神様がお怒りになったのかな」
「それじゃ、」

神主さんによく拝んでもらって神様の気持ちを静めてもらおうと良い」

村人たちはこんな相談をして神主に頼みました。神主さんは、

「よしよし」

と気持ちよく引き受けてくれました。さっそく着物を着替え、手を洗い、口をすすいで神社の本殿に座り、何回も頭を下げて神様を拝みました。

すると、本殿の奥のほうからかすかな声が出て、

「今掘っている井戸の南、六尺(一・八メートル)のところに掘りなさい」

とお告げがありました。

村人たちは、早速お告げのあった場所を掘りました。

「どうした、まだ水は出ないか」

上で土を上げている人が聞きました。井戸の中で一生懸命、土を掘っている人が泥にまみれた顔を上げて、「このねば土はだいたいぶ湿っているからもう水は近いぞ」とどなって、「よしよし」

とほりくわを土の中に打ち込みまし

た。すると、ポッカリとそこに穴が開いて、ものすごい勢いで水が噴き出してきました。中に入っていた人は驚いて、土を上げる縄につかまって飛び出してきました。

「水が出たぞー」

「水が出たぞー」

村人たちは大喜びです。

その時井戸の中から、



「すごい鯉だなあ」

「こんな大きな鯉は見たことないぞ」

「この鯉なら大勢でたべられるぞ」
わいわい集まって来てみんな勝手なことを言っています。そのうちに大きな桶が運ばれ、水を入れて鯉をいれました。この話を伝え聞いて方々

から鯉を見に来る人で、神社の庭はにぎわいました。

「さて、この鯉をどうしたものでしょうか」

村人たちは集まって相談しました。

「この鯉は神様のお使いかもしれないから、うかつなことはできないぞ」

「川へ放してやったらどうだろう」

「それじゃあもったいない。せっかくなの村に授かったものだから」

「池でも作って飼ったらどうだ」
みんな思い思いのことを言っていた

なか決まりません。

そこで、神社の庭から出た鯉だから、神主さん

に決めてもらおうということになりました。神主さんは、

「皆さんがそう言われるのなら、私の考えを言わせてもらいましょう。せっかくなの授かり物だから、川へ放してしまうのはもったいない。池や桶の中で飼っておけば、鯉は段々弱って死んでしまふでしょう。そこで、食べてしまふのが一番いいと思うがどうだろう」

村人たちは驚いて顔を見合わせました。そして、とんでもないという顔をしました。その顔を見回して神主さんは、

「みんなで食べようと言うのでは無い。京の都にいらっしゃる帝(天皇)に差し上げようと言うのだ。そして、帝に食べていただくと言うわけだ」

村人たちはみな賛成しました。そこで、大きな桶に長い棒を日本縛り付けて、体の丈夫な、いつも行いの良い立派な若者を選んで、京の都までかついで行くことになりました。

さて、神主と若者たちは、無事に鯉を帝に差し上げることができました。帝は大変お喜びになり、「こんな立派な鯉を食べてしまうのはもったいない。この鯉は神社の使い姫として大事に育てなさい」と言われてお返しになりました。

そして

「日本一社禁鯉の宮」と書かれた勅額を下さいました。神主と若者たち

は、

「苦労して都まで持って来たかいがあったわい」

と手を取り合って喜びました。また、その時に、

「村人は鯉を食べたり、鯉の絵の付いた品物を使用しないように」とのお達しがありました。



神主さんたちは、村に帰ると鯉が現れた井戸は神泉として、人々の使用を禁じました。

また、村人は鯉は神様の使者であると考え、これから後鯉を捕ったり食べたりしなくなりました。

それから何年かが過ぎ、村に何度も花が咲き蝉が鳴き、紅葉が散り雪が降り静かな日々が続きました。

ある日のことです。お宮の近くの農家に火事が起こりました。折り悪く、風下にあつたお宮の立木や屋根に火の粉が、雨のように降ってきました。村人たちは、お宮が燃えてしまつては大変だと、夢中でけそつと

しましたが火の勢いはますます強くなり、もうもうと立ち込める煙とバリバリと燃え広がる炎で、お宮の木々ももえはじめました。

「大変だ、お宮が燃えてしまう」

みんな大騒ぎです。その時、近くの川の木がガシヤガシヤと大きく波立ちました。数え切れないほどの鯉の大群が、

水面を真っ黒に染めていました。その大群は水面から顔を出すと、今にも燃えようとしているお宮を目がけて、いっせいに水を吹きかけました。水は唸り上げて飛び、木立にお社に、大雨のように降り注ぎ、火を消し止め、お宮も御神体も無事だったそうです。火の消えた後の川面には、鯉の姿はなく村人の歓声がいつまでもいつまでも響きわたっていました。





永い年月を経た今でも、この辺りの人たちは、鯉を捕ることもなくまた、綱や釣針にかかっても逃がしてやるということとです。それに鯉のぼりもあげません。

人から聞いた話ですが、花嫁衣裳についている鶴のくちばしも、お鯉さまをつついては困ると言うので、くちばしを糸でしっかりと結んで置くのだそうです。

結城七社のひとつ、高椅神社に伝わる不思議な鯉のおはなし、これでおしまい。